東京通信

傍若無人

八木三男

東京に住んで異様に感じることのひとつに、不動産に関する新聞広告や折り込み広告の多いさがあります。それらにはちょっとした一戸建の住宅の価格が億の単位で並んでいて、通常の金銭感覚ではついていけません。

たとえば住宅地で、小田急代々木上原駅徒歩二分七四坪十三億五千万円、中央線荻窪徒歩六分三三坪一億五千万円、同二七坪の土地二二坪の中古住宅付一億円。一般に東京の不動産には統一された精緻な評価基準があり、掘出しものはないといわれるから、例示したものは特別のものではありません。最近の新聞報道によると、東京区内のマンション（2LDKあるいは2DKが標準か）の平均価格は五千万円を超え、首都圏（千葉・埼玉等を含む）でも三千五百万円以上だといいます。東京の通常の生活者の買得限度価格は三千万円だといいますから、既に限度をはるかに超えています。

一般に個人の宅地や住宅は使用価値として所有するもので、そのかぎりでは利潤を産み出しませんから、なん億円という宅地の買得者がいるとすれば、あるいは別の思惑があるのかもしれません。

いずれにしろ、東京の地価暴騰による住宅価格の急騰は中曽根の民活による東京改造の唱導以来のことで、今や金融・情報・文化等が一層東京に集中し、さらに四全総などで一挙にその速度を速めつつあります。マンション価格はいっきに昨年の一・五倍、地価暴騰もとどまるところを知らないようにみえます。

こういうなかで、東京の家持ちは家持ちで、来年度の固定資産税の評価替えでどのくらい増税になるのか、相続税はどうなるかなど浮き足だっているところがあります。地上げ屋＝暴力団によって地借りの住民が家に放火されたり、ダンプカーに突っこまれて家を破壊されたりもしています。

固定資産税についていえば、地価の動きで税額が変動する仕組みになっていますから、いまのような地価騰貴のなかでは、現在の営業法人と一般の生活者の土地所有を同列にみなす応益原則は、一挙にいわゆる不公平税制として、東京で問題化される可能性がでてきました。

さて、一言つけくわえておくと、ここでわたくしが「生活者」といっているその「生活」とは、消費過程だけでなく労働過程をふくむ人間の生活活動の総体をさしています。そこからその人の生活様式や生き方や人生設計などをまるごと包摂した具体的な生活者としてのヒトをみようというのです。むろん、いまのわたく

しには東京の「生活」はまだほとんど見えませんが、2DKの住み心地は経験的には窮屈このうえなく、閉じこめられた感じで人間らしい生活ではありません。それでも九尺二間の大江戸の棟割長屋に比べれば多少ましなのかもしれません。広々とした村上の自宅でくつろぎたい誘惑にかられます。

このようにみてくれば、好核的軍拡といい、税制改革といい、国土計画といい、自民党中曽根悪政は、さしずめ傍らにヒト無き若しということになるのでしょう。

以上、いままでいってきたことを宮本憲一流(『都市経済論』筑摩書房)に都市問題一般としてなぞり返せば次のように要約できると思います。一般に現代都市における金融・情報・文化等の集中・集積利益は、企業や地主が独占し、公害・交通混雑等の集積不利益を負担せず、それを社会的損失として自治体や一般市民に転嫁する、ということです。

したがって、地価異常高騰による住宅問題、固定資産税・相続税等の問題はその集中的表現ということになり、特殊中曽根悪政の結果でもあります。さらに市民共同の施設や建物の設立は地価問題を中心に自治体の財政では手が出なくなり、集積不利益の市民への転嫁が加速されます。

連日の広告に億単位の不動産が並んでいるなかに、三千万円レベルのものが発見されると、これは安いなどと思ってしまうから、われながら他愛ないものだと苦笑を禁じえませんが、三千万円のもつ一般生活者にとっての重みは、生涯の借金としてついてまわるそれ自体途方もないものに違いありません。

さきの「東京通信」で書いた渋谷公園通りの若者たちは、こんななかで人間らしい生活設計の見通しがもてず、その日暮しの気持でただ歩いていたのかもしれないと思いはじめました。まったくこの大東京で人間らしい居住空間を確保するのは並みの稼ぎでは不可能です。インフレ傾向のアメリカ都市民の気持が最近あらためて拝金主義に急傾斜しているという新聞報道がありました。

このようにして、都市問題の中核が住宅問題だとすれば、最近の東京の状況は都市の荒廃とよんでもよいと思います。都市荒廃がまず若者たちの心の荒廃に連なりやすいのは道理です。

かつてマルクスは『資本論』で都市問題にふれて、労働者は賃上げではストライキをするが、腐敗した飲料水の改善のためにはストライキをしないと批判したことがあります。この点では、現在の日本の労働運動は、活動領域が広がったといっても、一九世紀と似た点が多分にあります。特に最近の右翼的再編状況のなかではその感を一層深くします。

ある日の地下鉄千代田線の午後十時頃、安孫子行は満員のスシづめでした。残業の帰りがこの時間に集中します。2DKの極狭小空間に帰って泥のように眠るのでしょうか。

一九八七・六・二五

(やぎ　みつお＝県民教育研究所副会長)